壺に油が満たされた奇跡

2022年9月18日　説教「シュネムの女」

列王記第二4章8～17節

4章冒頭には、預言者エリシャが未亡人の苦境を助けました。多数の器に油が満たされ、負債の返済が果たされ、子どもたちとの生活が回復するという主の奇跡の御業をみました。今朝の記事は場所も人も変わります。

1．**エリシャの働きの拠点（8～10節）**

①シュネムの女（8）**「ある日、エリシャがシュネムを通りかかると、そこにひとりの裕福な女がいて、彼を食事に引き止めた。それからは、そこを通りかかるたびごとに、そこに寄って、食事をするようになった。」**場所はイスラエルの北、イズレエルの平原にあったシュネムという町でした。そこにエリシャはやって来ていたのです。一人の女性がエリシャの存在に目を止めます。彼女は経済的に豊かな家の妻でした。導きを得て、エリシャを食事に招きます。それはちょうどイエス様がベタニヤに行くと、マルタとマリヤの家に立ち寄られたように、エリシャもシュネムに行くと、この女性の家を訪問して食事に与ったのでした。

②夫への進言（9）**「女は夫に言った。『いつも私たちのところに立ち寄って行かれるあの方は、きっと神の聖なる方に相違ありません。』」**女は夫に自らが受けた、エリシャについての感想を伝えます。「あの方は、きっと神の聖なる方に違いありません」。ということは、彼女はエリシャの事をまだよく知っていません。逆に言えば、エリシャが預言者であることは、出来事を通して確認されていったということでしょう。ともあれ、霊的必要をかかえていた女性にとって、エリシャはそれを満たす何かを持っている神の人だと思われたのです。

③屋上の小さな部屋（10）**「『ですから、屋上に壁のある小さな部屋を作り、あの方のために寝台と机といすと燭台とを置きましょう。あの方が私たちのところにおいでになるたびに、そこをお使いになれますから。』」**そこで、女は夫に進言します。屋上に小さな囲いのある部屋を作って、そこをあの方が来られる時に使っていただきましょう。そこには寝台と机と椅子と燭台を用意しましょう。要するに、エリシャの仕事の拠点の一つをこの家の中に用意しましょうということです。あのエリヤにはツァレファテの貧しき女の屋上の間が備えられたことが思い出されます。

2．**エリシャとシュネムの女（11～13節）**

①部屋に入り（11）**「ある日、エリシャはそこに来て、その屋上の部屋に入り、そこで横になった。」**ある日、エリシャはその屋上の部屋に来て、横になったのです。そこは休みの場所としても有益だったようです。女の思い計ったことが、ここに実現しています。エリシャも働きをするために、このような場所が備えられたことを、主の

備えと考えていたことでしょう。働きが生身の体を用いてなされるのですから当然です。

②ゲハジ（12）**「彼は若い者ゲハジに言った。『ここのシュネムの女を呼びなさい。』彼が呼ぶと、彼女は彼の前に立った。」**そのとき、エリシャは若い従者のゲハジを通して、この女を呼び出したのです。敢えて、ゲハジを遣わしたのは、彼に経験を積ませるという意味かもしれません。彼女はエリシャに挨拶をした後はその場を退いたのでしょうか。

③エリシャの問い（13）**「エリシャはゲハジに言った。『彼女にこう伝えなさい。（ほんとうに、あなたはこのように、私たちのことでいっしょうけんめいにほねをおってくれたが、あなたがたのために何をなしたらよいか。王か、それとも、将軍に、何か話してほしいことでもあるか。）』彼女は答えた。『私は民の中で、しあわせに暮らしております。』**エリシャはゲハジを通してたずねます。まずは労いの言葉をかけます。「私のために骨を折ってくれてありがとう。」そして要望を聞きます。「王や将軍であっても、取り次ぐ要望があれば、遠慮なく言いなさい。」すると、女性は（神の恵みを受けて）、幸せに暮らしていますから、特段の要望はないことをツタます。

３．**男の子を抱くように（14～17 節）**

①何をしたら良いか（14）**「エリシャは言った。『では、彼女のために何をしたら良いだろうか。』ゲハジは言った。『彼女には子どもがなく、それに、彼女の夫も年をとっています。』」**この反応を受けて、エリシャはこの女のために何かできないものかと思ったのです。そして、ゲハジに彼女のためにできることはないかと尋ねたのです。すると、ゲハジは答えます。「彼女には子どもがありませんしかし、何と言っても夫も年をとっていますから、そのことは望むべくもないかもしれませんが。」と配慮しつつ、女の必要を述べました。

②来年の今ごろ（15～16）**「エリシャが、『彼女を呼んで来なさい。』言ったので、ゲハジが彼女を呼ぶと、彼女は入口のところに立った。エリシャは言った。『いいえ。あなたさま。神の人よ。このはしために偽りを言わないでください。』」**エリシャはそれを聞いて、ゲハジに、彼女を呼んでくるように伝えます。彼女はやって来て、エリシャの前に立ちます。エリシャは神から与えられたメッセージを告げたのです。『来年の今ごろ、あなたは男の子を抱きます』。すると、女は大いに驚いて、思わず否定してしまいます。「いいえ。神の人よ。このはしために偽りを言わないでください』。へりくだった言い方ですが、彼女はこのことについて、エリシャの言葉をまっすぐに受け取ることはしませんでした。

③男の子を産んだ（17）**「しかし、この女はみごもり、エリシャが彼女に告げたとおり、翌年のちょうどそのころ、男の子を産んだ。」**しかし、エリシャが告げたように、やがてこの女は身ごもりました。そして、時期もエリシャが告げた来年の今ごろという言葉の通りでした。この間の女の心持ちなどは記されていません。おそらくは終始、驚きつつ、感謝し、よろこばされる時であったことでしょう。

《結論》今朝の聖書記事からシュネムの女の信仰を考えていきます。

第一に、この女は預言者エリシャを自らの家での食事に招きました。その
後、夫に相談して、自らの家にエリシャの滞在できる屋上の部屋を提供して、
そこに寝泊まりし、仕事ができるようにしています。それは、彼女がエリシャと
接した時に、この人は神が遣わされた人であることを直感したからです。ここ
に、彼女の信仰をみます。確かに彼女は裕福な環境にありました。しかし、彼
女はそれを用いようとしていました。また、夫の意向を尋ね、神の御心をさぐろ
うとする客観的な信仰姿勢がありました。

第二に彼女は、エリシャに何か願いがあるならば、王や将軍にでも掛け合
おうとと言われた時に、「私は民のなかで、しあわせに暮らしています。」と述
べています。彼女は主に感謝する心を持って歩んでいたのです。十戒の第十
の戒めは「あなたの隣人の家を欲しがってはならない」（出エジプト記
20:17）とありますが、彼女は今あるものを、主から与えられていると信じ、感
謝していたと思われます。ここに彼女の感謝の信仰を見ます。「すべての事に
ついて感謝しなさい。」（第一テサロニケ 5:18）にも通じています。

第三は彼女の信仰にチャレンジが与えられている部分についてです。彼女
はエリシャから「来年の今ごろ、男の子が与えられる」と言われた時に、「いい
え、あなた様。神の人よ。このはしために偽りをいわないでください。」と反応
しています。どうして預言者の言葉を素直に受け入れられなかっ

たのかと思
われる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、かつてアブラハムの妻サラも、
同じような場面において、心の中で笑っていました（創世記18:12)。妻エリ
サベツが胎内に子を宿される時に、夫のザカリヤも疑っていました（ルカ
1:18)。イエスの母マリヤの場合、「あなたはみごもって男の子を産む」とい
う御使いの言葉を聞いても、「どうしてそのようなことがありえましょう」(ルカ
1:34）と伝えています。しかし、マリヤは「神にとって不可能なことはない」と
言われて、「ほんとうに私は主のはしためです。どうぞ、あなたのお言葉どおり
この身になりますように」と告白しました。彼らに、主は常識ではあり得ないこ
とを示されたのです。それは信仰のチャレンジでした。マリヤ以外、御言葉を
真っすぐには受け取れませんでした。
そこで、今朝教えられることは、本人の信仰がそこにたどりついていなくて
も、恵みによって事を起こしてくださる主の恵みです。「求めなさい。そうすれ
ば与えられます。」（マタイ 7:7）とあり、本人の求めも大切ですが、求めの祈
りがなくても、一方的に憐みの道が開かれてくることがあるのです。シュネム
の女にもその恵みが臨んでいたのです。
私たちの歩みにも、主は最も大切なものを、一方的に与えてくださることが
あります。あなたにとって、また私たちの教会にとって、最も大切なことについ
て、気づいていない時にも、主はそこに働いて満たしてくださいます。あえて言
えば、シュネムの女の場合、彼女の信仰の従順さが用いられたという側面が
あるでしょう。主なる神さまのお恵みを覚えつつ、不信仰を悔い改めて、祈り、
主の大いなる御手のなかに入れていただきたいのです。